



## 文部科学省 IB教育推進コンソーシアム

# STUDENT TESTIMONIAL



### 佐々木葵彩さん (市立札幌開成中等教育学校 2022年度卒)

2022年度、市立札幌開成中等教育学校を卒業し、将来はプロバレエダンサーをサポートする医師になるため、The University of Melbourne / メルボルン大学で解剖学を履修予定。

「海外の大学を断念せずに挑戦し続けられたのは、IBでリスクテイカーの精神を学んだことも大きく影響したと思います。」

きっかけは、英語で授業を受けられる国際バカロレア (IB) 教育に魅力を感じて。留学経験で他国での出来事が「自分事」に感じられるようになった。

もともと英語が好きで、英語で授業を受けられるのが魅力だと感じて IB ディプロマ (DP) へ進みました。英語を好きになったきっかけは、家でかかっていたマイケルジャクソンの CD を聴いて、それから海外の映画・音楽・アニメに親しむようになったからです。生まれながらの好みだったのか、海外の作品が感覚的に好きでした。

高校1年の時に、トビタテ！留学 JAPAN でニューヨークに2週間短期留学する機会に恵まれ、色々な国の友達ができ、その子たちとは今でも英語でコミュニケーションを続けています。他の国での出来事が「自分事」に感じられるようになりました。ニュースで見て、あの子がいる国だなと思ったりするようになり、色々なものに興味をもてるようになり、そういった経験からも国際的な感覚を身に着けていけるようになるのかなと思います。

それぞれが得意な分野から話し出して、TOK (知の理論) のディスカッションが始まっていく環境が私は大好きで、自分にも合っていた。

中高一貫校で IB ミドル・イヤーズ・プログラム (MYP) でまず学び、2020年から2年間 IBDP で学びました。IBDP コースの生徒は、少人数だったこともあり、常に一緒にいるせいか、どんどん考え方 (の論理構成) が似ていく感覚がありました。

例えば、社会で起きている問題を話す時も、「私は自然科学の観点から話すけど」「私はジェンダーの観点から」という感じで、それぞれが得意な分野から話し出して、TOK (知の理論) のディスカッションが始まっていく。そういう環境が私は大好きで、自分にも合っていたんだと思、います。

IBDP の科目選択としては、日本語：文学 SL、英語：言語 HL、日本語：歴史 SL、日本語：生物 HL、英語：物理 SL、数学 AA HL を取っていました。

大学進学を考える際、私は医学部志望でしたが、例えばイギリスの大学で医学部を受験したい場合、生物と化学を選択していないと受けられない場合が多く、私のように化学を選択していないと不利になります。どこの国のどの大学、どの分野に進みたいかによって、入学要件に求められるものの傾向が違いますが、大学によってはスコアさえあれば科目選択については問わない場合もありますので、私の場合は結果的に多くの大学に出願することができました。

IBDP において、少人数のコミュニティで、先生も一緒に議論していく授業のスタイルを私はとても楽しんできました。IBDP の教育環境で培うことができた「物事を深く考え発言に繋げていけるスキル」が、日本の大学での講義中心の授業では、生かせなくなるのではないかと感じたことも海外の大学を選ぶ理由になったと思います。



立てた計画を実行して振り返り、次の計画に反映していくということがIBDPでの学びによってできるように。

高校3年の1月までは国立医学部を第一志望にしていました。この数か月で、今年の2月～3月の頃の自分からは想像もしないような自分自身の変化を経験しました。海外の大学を受験することになり、IBDPで得たスキルを活かすことができると感じて、今はメルボルン大学で学ぶことを楽しみにしています。

かなり具体的に将来の進路を決めていますね、と言われることもあるのですが、IBDPの学びの中で、エッセイをたくさん書いたり、高校でもプレゼンテーションを経験したり、目標を実現するためのプロセスについて深く考える機会に何度も恵まれたからだと思います。どんな話をする時も、相手に納得してもらえるように話そうとすることが習慣になっています。

課題論文(EE)では、私は将来バレエダンサーの医師になることを目指しているのです、バレエに関連するテーマで書きたいと思い、最終的に「歴史」におけるバレエの役割について掘り下げました。具体的には「芸術のプロパガンダ的な利用の一種としてバレエも使われた」といったテーマにして書きあげました。取り上げたテーマや、書いたことは、大学受験の時に面接で聞かれることがあります。私は理系だったので、当初は物理や生物の観点から分析して書こうかも考えましたが、結果的に文系の視点で書いたことで、文系科目での成果を面接で聞かれた際にも、やりたいことときちんと紐づけて話すことが出来たので良かったと思います。

IBDPで得たスキルで役に立っていると特に感じるのは、私の場合は「振り返りのスキルとリスクテイカーの精神」が役立っていると感じます。私は、なかば衝動的に「面白そうだからやろう！」とすぐに行動に移してしまうことがあります。ただ、行動を始める前にある程度の計画を立て、だめだった場合のプランBも考えておくこと。そして立てた計画を実行して、振り返り、さらに次の計画に反映していくということがIBDPでの学びによってできるようになりました。また、経済的な困難さが予想されても、海外の大学を断念せずに挑戦し続けられたのは、IBでリスクテイカーの精神を学んだことも大きく影響したと思います。今後の人生でもきっと役に立つと感じています。

オーストラリアで学んだことを日本に持ち帰れる医師を目指して。

私は小さい頃からバレエを習っていて、中学2年のとき骨折した際、踊ることのできない辛さを初めて経験しました。治療後、足首の可動域が変わってしまったりして、関節の可動域や動作の角度の差違が作品の完成度に影響する芸術としてのバレエにおいて、スポーツ医学とは異なる専門的な医学分野の発展の必要性を感じました。この経験から、バレエ大国でもある日本におけるダンス医学専門医の需要は必ずあるはずだと考えるようになりました。

オーストラリアではバレエ団に専属のメディカルチームが存在し、理学療法士の分野も日本より進んでおり、日本に比べて社会的地位も高く、そうした環境下のおかげかバレエ団でのケガの発生率が低いとも聞いています。

私は、オーストラリアで学んだことを日本に持ち帰ることを目指しているのです、理学療法士ではなく、医師を目指しています。日本で治療の方向性を示す権限をもつのは医師だからです。メルボルン大学で解剖学を専攻したいと思ったのも、骨と筋肉、臓器との関り、運動生理学などを学べると思ったからです。大学ではそういった分野で有名な論文を書いた教授とも、ぜひ直接お話しがしたいです。また、国際的な団体のチュートリアルプログラムを利用して、メルボルン大学以外の他の大学の学生とも授業やディスカッションをしたいと思っています。

#### 現役IB生・IB校入学を検討している方へのメッセージ

IBDP生の後輩も、IBDP生ではない生徒のみなさんも、まだ10代なので「とりあえずやってみる！」失敗したとしてもそこからまた取り返せばいい、と伝えたいです。私も今のうちにたくさん失敗して仲間を作って学んで、数年後の自分に感謝されるような今を生きていきたいなと思っています。

自分の頭が若くてやわらかい今だから感じ取れる事、気づける事がきっとあります。好奇心や情熱に従って、目の前にあるチャンスを積極的に掴んでほしいです。向こう見ずな行動のように見えても、きっと、色々な場所で、素晴らしい機会に、たくさん恵まれると思います！